

徳川慶喜（池田聴風）

大政奉還 変遷 有り

將軍の命は轉茫然

丹心火の如くなるも 瓣を須いず

正に是れ 従容として 身を天に奏す

解説 大政奉還や新政府軍への江戸開城を行なった將軍を詠った詩。

語釈 ※徳川慶喜Ⅱ江戸幕府最後かつ日本史上最後の征夷大將軍で徳川宗家を相続した約四か月後に第十五代將軍に就任。大政奉還や新政府軍への江戸開城を行なった。※大政奉還Ⅱ江戸時代末期の慶応三年十月十四日に江戸幕府第十五代將軍徳川慶喜が政權返上を明治天皇に上奏し、翌十五日に天皇がこれを勅許した政治的事件である。※変遷Ⅱ時の流れとともに移り変わることに。

※轉Ⅱある状態が、どんどん進行してはなはだしくなるさま。いよいよ。ますます。※茫然Ⅱ漠然としてつかみどころのないさま。※丹心Ⅱまごころ。赤心。\*瓣Ⅱ説明。※従容Ⅱゆったりと落ち着いた状態。危急の場合にも、慌てて騒いだり焦ったりしないさま。※従容Ⅱゆったりと落ち着いている。※奏Ⅱ天子に申し上げること。

通釈 大政奉還も時の流れとともに移り変わり、將軍の命も益々漠然としている状態である。將軍の心は燃えたぎるも、大政奉還についての瓣ももちいず、正に落ち着きを持って政權を天皇に委ねた。